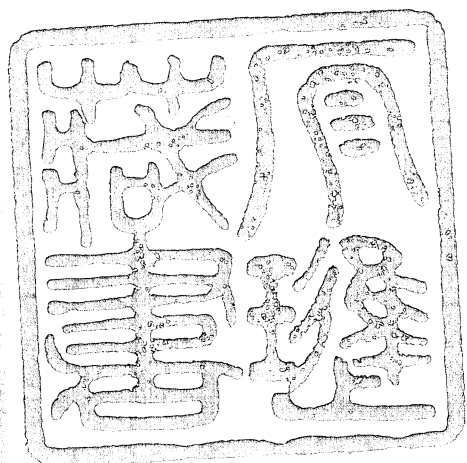


山下裁判



A・フランク・リール
下島 連訳

THE CASE OF GEN YAMASHITA

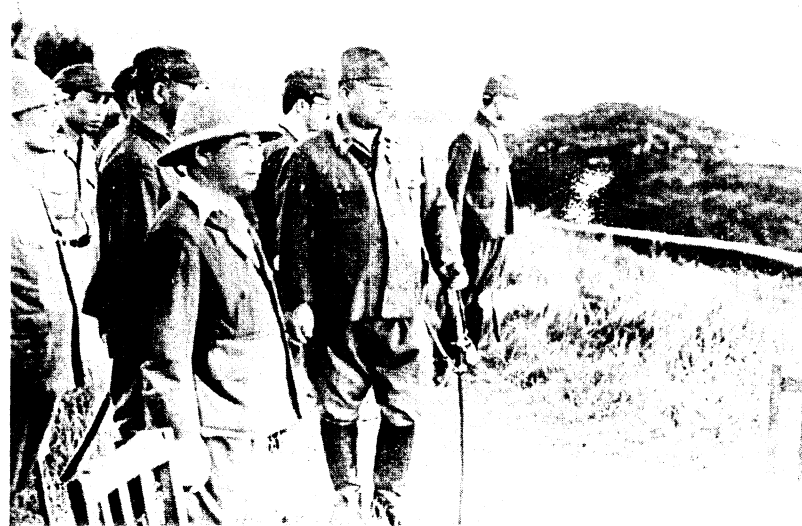
日本教文社刊

0001918281

大

一

A・フランク・リール



カンニング要塞よりシンガポール市街を眺瞰する山下大將

將軍パーシヴァルと會見
イエスカノーかの一瞬



日本語版への序

『山下裁判』はアメリカの讀者のために書かれたものである。これを書くに至つた理由は本書第一章の冒頭に述べてある。

しかし、今や情勢が一變し、合衆國において發表されたと正確に同じ形で本書を日本で出版することが許されるに至つたことは私の深くよろこびとするところである。さらに、私はこの翻譯が貴國と我が國を一層緊密に結びつけるのに役立つことを希望する。

第一に、民主社會では、すべての人々は、指導者を自由に批評する權利があるということとを本書は明白に示している。輕卒にも、このことを民主主義の弱點と見なす者がある。勿論、その反對が正しい。これこそ、民主主義の力の最も重要な根源である。

第二に、山下事件に際してなされた故マーフィー判事、故ラトレッジ判事の反対意見以上、自由社會個有の司法及びフェア・プレーの原則をよく表明したものはない。激戦の直後、合衆國最高裁判所及び多分アメリカ國民の大多數が、これらの原則からの逸脱を許したということは、いささかもこれらの原則の正當性を減殺するものではない。それは戦争そのものと同じく、人類の類人猿からの苦心慘澹たる進歩は激しい逆行をとまなうということを物語っているにすぎない。

最後に、合衆國において本書の刊行を迎えた批評は、本書を読んだ大多數のアメリカ人が、その基本的な主張に賛同していることを示している。この事實を十分に理解することは、怨恨を拂拭し、眞の友情への目標に向つて我々をよりかたく結びつけるのに役立つことを私は心から希望する。

一九五二年四月十一日

ニュー・ヨーク市にて

A・フランク・リール

山下裁判 目次

日本語版への序

- 一 強姦・虐殺・聲明
- 二 戦争法
- 三 敵の眼を通して見た戦争
- 四 舞臺装置
- 五 喚問
- 六 登場人物
- 七 軍事裁判官
- 八 主役
- 九 虎は如何にして名聲を高めたか
- 一〇 武藤の語る山下
- 一一 精神病理學者の診断
- 一二 一つの疑問とインタビュー

101 89 78 74 70 57 43 44 39 19 9 3

一三 迅速

一四 法的道義

一五 疑惑

一六 さらに時間を節約するために

一七 ゲリラ

一八 バラワン事件

一九 口供書だけ

二〇 結びつけようとする試み

二一 フイリピンの歴史と政治

二二 ビスルミノ

二三 エホバの目撃者

二四 長い答え

譯者のことば

211 202 193 186 173 168 165 158 144 139 126 121 105

山下裁判



下巻目次

二五	辯論
二六	燃えるサーカス
二七	絞首刑
二八	ドイツ人破壊者
二九	障礙と問題
三〇	非正統的な措置
三一	法廷は辯論を聴くことを欲する
三二	さよなら
三三	最高裁判所
三四	意見
三五	將軍と大統領と絞首刑
三六	より永久的な害毒
合衆國最高裁判所における山下裁判	
○一九四五年十月期に合衆國裁判所において判定された事件	
最高裁判所の意見	
判事マーフィー氏の反對意見	
判事ラトレッジ氏の反對意見	
一、基本的法律よりの逸脱	
二、軍事裁判所設立の無効性	
三、辯護準備の機會の拒否	
四、軍律の適用性	
五、一九二九年のジェネヴァ條約	
六、第五修正	